

堀内修による 「ワルキューレ」聴きどころ・聴き比べ

2013年8月25日神奈川県民ホール大会議室

I

- 「ニーベルングの指環」は、リヒャルト・ワーグナー（1813-1883）の舞台作品で、「ラインの黄金」「ワルキューレ」「ジークフリート」「神々の黄昏」の4部から成る。
- プロローグ付きの3部作の形式は、ギリシア悲劇になっている。
- ドイツ語で、レチタティーヴォ、アリア等で構成されるのではなく、詞と音楽が一体化している。
- 1848年、最初の案を作ってから26年の歳月をかけて完成した。
- 1876年、この作品のために作ったバイロイトの劇場の、第1回の音楽祭で「ニーベルングの指環」は初演された。
- 権力の象徴である指環をめぐる物語は、神話だが、現実の世界を反映している。
- 「ワルキューレ」は第1夜で、全3幕から成る。最も人気があり、単独でも多く上演される。

II

- 「ニーベルングの指環」全体は、世界の秩序と愛をめぐるって進展する。
- 「ワルキューレ」の第2幕で、その主題と、そして主人公が明確になる。
- それはヴォータンの使者として、ブリュンヒルデがジークムントに死を告げる場面。
- ここは《問いと答え》でできている。
- 第2幕全体が叙事詩的だが、ここも例外でない。
- 淡々とした進行で、ライトモチーフの数も限られている。
- だがここで「指環」の重要な事件が起こる。
- それは《秩序》の側に立っていたブリュンヒルデが気持ちを変え、《愛》の側に移ることだ。
- ブリュンヒルデが心を決める時は、しかし一瞬にすぎない。
- ここは感情を動かされるというより、理解するところ。
- しかしブリュンヒルデが移った世界はすでに明示されていて、私たちはそれが何かを知っている。
- ここで全曲の主題としての愛と秩序が明らかにされ、「指環」の主役がブリュンヒルデであると示される。

III

- 「ワルキューレ」は2つの抒情詩的な幕のあいだに、叙事詩的な幕がはさみ込まれて出来ている。
- ブリュンヒルデが支持する《愛》は、言葉だけでは大きな意味を持たない。
- しかしワーグナーは、それが何かを体感させる。それができたのがワーグナーの天才だろう。

- 《愛》はジークムントとジークリンデの場、つまり第1幕で描かれる。
- 「ワルキューレ」の第1幕は、「指環」全曲中、そしてワーグナーの作品中、最も叙情的、叙情詩的だ。
- だがそんな抒情詩の幕でも、かなりの部分が《語られる》
- この叙事詩的な《語られる》ことこそ、ワーグナーの本質と見ることもできる。
- 「ワルキューレ」の第1幕では、まずジークムントが過去を語る。
- 叙事詩から抒情詩への移行、そして過去と現在の劇的なつながりは、ジークリンデが、ジークムントのもとに現れ歌う語りの中で起こる。
- ジークリンデの興奮を作り出すのは、剣のファンファーレ。
- 剣＝ノットゥンク のモチーフは、「指環」の中で高揚をもたらす力としてたびたび出てくる。
- 叙事から叙情へ、過去から現在へは、ジークリンデの物語の中で、爆発的に変化する。
- 《愛》の陶酔の体験は、幕切れまで続く。

IV

- ブリュンヒルデの変化に、ジークムント、ジークリンデの変化と、登場人物の変化はオペラの伝統で、ワーグナーもこれをよくわかっていた。
- 「ワルキューレ」の第3幕にも、「指環」全体にとって大きな変化がある。
- それは生きる希望をなくしたジークリンデを、ブリュンヒルデが救おうとするところ。
- 怒ったヴォータンが近づく緊迫感の中で、ジークリンデの絶望から希望への変化は起こる。
- ほんの短いあいだの変化だが、ここに2つの重要なモチーフが初出する。
- 《愛の救済》と《ジークフリート》
- ジークフリートは次の「ジークフリート」の主役で、ブリュンヒルデの相手でもある。
- 《愛の救済》は「ニーベルングの指環」全体をしめくくることになるモチーフ。
- 「ワルキューレ」のいわゆる聴きどころではないが、とても大切な、印象的な場面だ。
- 結局ジークリンデは、これを最後に物語から消え、ジークフリートを生んですぐ死んだのが語られることになる。
- しかしここで絶望は希望に転じている。
- 「ニーベルングの指環」は「神々の黄昏」の終わりで、絶望的な世界の破滅のあと、《愛の救済》が奏されて終わる。